

令和 6 年 6 月 12 日現在

機関番号：34315

研究種目：若手研究

研究期間：2022～2023

課題番号：22K13050

研究課題名（和文）東アジア漢字圏の文化交流と日本漢文学：近藤元粹校訂漢籍と和刻本漢籍出版の考察から

研究課題名（英文）Cultural Exchange in the East Asian Sinographic Sphere and Japanese Kanji Literature: A Study of Wakokubon Works annotated by Kondo Gensui

研究代表者

JIN CHUNYU (JIN, CHUNYU)

立命館大学・立命館アジア・日本研究機構・研究員

研究者番号：60865228

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、明治期に大きな貢献をなした近藤元粹（1850-1922）を取り上げ、彼の漢籍受容・和刻本漢籍出版に焦点を当てて、漢籍受容の実態と漢籍を通じた文化交流の意義を明らかにしたものである。具体的には、関連資料を収集・整理することで、近藤元粹の漢籍受容・和刻本漢籍出版の概況を明らかにした。近藤元粹の漢籍受容の様相を検討し、彼が注や評語を附した漢籍を分析し彼の業績の文化交流史的な意義を解明した。近藤元粹が関与した和刻本漢籍出版の事情を明らかにし、日中漢籍交流史におけるその意義を検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近藤元粹が関与した漢籍を土台に、国際的な研究を展開し、日中文化交流及び漢文学の展開を考える。さらに、近藤元粹の漢籍文献や和刻本の出版活動を素材に、書誌学・文献学だけでなく、日本文学全体研究の発展にも貢献できる。

研究成果の概要（英文）： This study focuses on Kondo Gensui (1850-1922), who made a major contribution to the Meiji period, and examines his reception of Chinese books and publication of Wakokubon to clarify the reality of his reception of Chinese books and the significance of cultural exchange through Chinese books. Specifically, 1) By collecting and organizing related materials, we clarified the general situation of Kondo Gensui's reception of Chinese classics and publication of Wakokubon. 2) By examining the aspects of Kondo Gensui's reception of Chinese books and analyzing the Chinese books to which he added notes and reviews, the significance of his work in the history of cultural exchange was elucidated. 3) The significance of his work in the history of cultural exchange between China and Japan is also discussed.

研究分野：中国古典文学

キーワード：近藤元粹 和刻本 漢籍 漢字文化圏

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

東アジアには、日本・中国さらに韓国・ベトナムを含めた漢字文化圏の長い歴史があることはよく知られている。しかし、明治以降になると、日本では欧米諸国との文化交流にもっぱら焦点が当たるとなり、当時に関する研究も欧米との関係が重んじられてきた。日本では西洋的な諸概念の導入に漢字を用いた造語が多用されたため、明治期に漢字の使用が増大したが、その事実も、またそれらの造語が中国、韓国に伝播したこともあまり知られていない。漢字文化圏としての交流についても日中韓で明治期に豊かな成果があったが、これまでその研究はきわめて手薄であった。

本研究が主たる対象とする近藤元粹(1850 - 1922)は、明治期に大きな貢献をなした漢学者であり、中国から渡来した漢籍を理解し、注や評語を付した漢籍の刊行にも積極的に関与していた。彼の詩文集には漢籍に言及する内容が多く見られ、特に各詩集の上欄に多くの評語が記録されており、明治文人の漢籍受容の研究をする上で傑出した事例といえよう。しかし、元粹の漢籍受容様相と漢籍出版に関する研究はまだ端緒の段階にある。また詩人として明治期から大正期にかけての詩壇への貢献は看過されてきた。そこで、本研究は元粹の漢籍編著書と和刻本漢籍の校訂に焦点を当て、漢籍の受容様相と漢籍を通じた文化交流の位置付けを明らかにするものである。

2. 研究の目的

具体的には、本研究は近藤元粹が編著・校訂・出版した漢籍(含全集・詩集)について基礎的な調査と分析を行うものであり、以下の3点を目的とする。

(1) 近藤元粹が編著した刊本の状況を明らかにする。先行研究によって、元粹の編著目録を精緻化させるとともに、未収資料を整理する。主に元粹の漢籍文献及び青山嵩山堂を中心とする出版活動を素材に、明治期の漢学者の日本漢文学史における正確な位置づけを行い、研究を進展させることをめざす。

(2) 近藤元粹の漢籍受容に関する研究を行う。具体的には自著『南州先生詩文抄』『蛭雪存稿』等に引用した漢籍と元粹が評語を付した漢籍を分析することによって、明治期の漢文学者としての元粹が、中国から渡来した漢籍をいかに受け入れたか分析し、彼の業績の文化交流史的な意義を明らかにする。

(3) 近藤元粹の漢籍出版に関する基礎研究を行う。元粹は多数の漢籍の出版に関与し、自らの取捨選択基準によって、『蛭雪軒叢書』『高青邱全集』『箋注宋元明詩選』などの漢籍出版にも力を注いだ。本研究は、元粹が関与した和刻本漢籍の出版及びその経緯・目的を明らかにすることをめざす。

3. 研究の方法

(1) 先行研究及び各所蔵機関の蔵書目録を利用して近藤元粹と関連する漢籍資料を収集・整理した。元粹の編著について、『大阪天満宮御文庫国書分類目録』『近藤南州著編書』がある。これに基づき、未著録本を(主として加点・校訂本)を『和刻本漢籍分類目録 増補補正版』や国会図書館の書誌情報などにより増補された『近藤南州編著刊本目録』(芳村, 2007)がある。本研究では、これを踏まえて原本調査・校訂漢籍の整理作業を行い、重要な和刻本漢籍を分析した。また、収集された漢籍をさらに詳細に検討することによって、元粹が注目した漢籍は四部分類にどのように分布しているかを明らかにした。

(2) 近藤元粹の漢籍受容の様相を検討し、彼が校訂した漢籍を分析した。近藤元粹が校訂した『中州集』『真山民詩集』などの重要な詩文集を事例として、漢籍受容の様相を整理してその成立背景を明らかにした。また、元粹の漢籍受容は明治文壇とも深く関わっている。特に詩文会「逍遙游社」「風騷吟社」を興してから人脈を広げ、小野湖山や菊池三溪などの漢詩人とよく交遊し、その漢籍受容も彼らと互いに影響し合ったと考えられる。そのため、当時の明治文壇の人物関係ネットワークを考察して、元粹の漢籍受容の学術的背景を検討した。

(3) 近藤元粹が関与した和刻本漢籍出版の事情を明らかにした。整理収集した資料には、元粹が漢籍を入手したことが記されており、彼が漢籍出版にいかん力に注いだかを示している。本研究では、元粹が出版した『蛭雪軒叢書』などの和刻本漢籍を事例として、その出版経緯などを明らかにし、日中漢籍及び文化交流史の視点からその意義を検討した。本研究では、二書に記載されている漢籍出版の部分に注目し、日中文化交流史の視点から元粹の和刻本漢籍出版の意義を検討した。

4. 研究成果

(1) 近藤元粹が関与した漢籍の実態

各種データベース及び各所蔵機関の蔵書目録を利用して近藤元粹と関連する漢籍資料を収集・整理した結果、以下のことが明らかになった。

刊本計 76 点が確認され、内容は経史子集にわたる。特筆すべきは、そのうち、『白楽天詩集』『王孟詩集』のような詩文類が三分の一以上を占めており、四書五経一辺倒の儒者でなかったことは明らかである。

近藤元粹自身が詩文に長けているのみならず、唐宋元明清の詩文を取捨選択し、その精粹を取り上げて正確な批評を加えているこのような和刻本漢籍が出版された結ことで、唐宋元明清の詩文の普及に重要な書籍資料が提供されたと同時に、漢詩の読者層がより拡大した。

(2) 『輯註増補高青邱全集』18巻の刊行

長沢規矩也『和刻本漢詩集成』に高青邱詩集の各版本が収録されている。清代の金檀が編輯した『高青邱詩集注』は最善の版本とされており、近藤元粹はこの金檀本に基づき、増補して最も完備な『高青邱全集』を出版した。青邱詩は世に高く評価されているが、全集が少なく、金檀の増補本が最も希少である。また、斎藤拙堂、菊池三溪によって『高青邱詩醇』七巻が刊行されたが、遺漏や誤謬が多く、高青邱詩文集の全貌を知るにははるかに足りない。そのため、元粹は青木高山堂を通じて、全集を出版した。

(3) 『箋注宋元明詩選』の刊行と清詩への批判

『箋注宋元明詩選』は近藤元粹が、清代の朱梓・冷昌言編輯・華黼臣箋注『宋元明詩約抄』に評を付し、校訂を加え、改名した詩選である。それを分析した結果、以下のことが明らかになった。

「序言」により、元粹は『宋元明詩約抄』二巻を『箋注宋元明詩選』四巻にしたことが明らかである。元粹がこの詩選に注目したのは、宋元明詩の選集が少なかったためである。

唐宋元明詩の刊行を通じて、当時の詩人が清人の詩風を模倣し、奇抜で難解な詩体を推重する傾向を変えようとしている。また上欄の評語は詩の用語から作品全体の雰囲気や意味まで多岐にわたり、場合によっては元粹自身の心境や体験と関連付けて評していることもある。

評語から、元粹が陸游、高青邱、元好問の作品を高く評価していたことが分かる。さらに元粹自身の宋・元・明詩への傾倒も反映している。特に『蛩雪存稿』「付録」に「寓感二十首次高季迪韻」が収録されていることから、元粹の高青邱詩を推賞する傾向が見られる。

(4) 詩文に見える近藤元粹の交遊関係

『評点古今名家詩文』及び『南州先生詩文抄』、『蛩雪存稿』などの資料を検すると、近藤元粹は日本の漢学者、漢詩人と交遊した一方、清客と詩文を通じた交流の記載が見られる。その一部の結果を以下のように整理した。

長三洲との交流

幕末・明治の漢学者長三洲の『三洲居士集』に、高青邱の詩韻を用いて作成した詩 5 首が収録されている。近藤元粹の著作『南州先生詩文抄』に高青邱の次韻詩 8 首が収録されている。次韻詩の中、同詩題の作品「擬高青邱客舍歲暮」(3 首)、「梅花」(3 首)、「郊墅雜賦」7 首あることから、元粹は長三洲の次韻作を参考にした可能性が高い。

菊池三溪との交流

『南州先生詩文抄』の上欄に菊池三溪の評語が見えるほか、菊池三溪の自筆稿本『学聚堂遺稿』(京都大学貴重資料デジタルアーカイブによる)に近藤元粹の朱批と墨批が施されている。それにより、明治二十一年(1888)から二十三年(1890)前後、元粹は菊池三溪と交遊したことが明らかである。

小野湖山との交流

『南州先生詩文抄』巻中と『蛩雪存稿』に湖山の評語が掲載されている。文抄の本文に「寿小野湖山翁八十、次其新年詩韻」、「長相思・送小野湖山翁東帰」とあるため、元粹は小野湖山と交遊したことが分かる。

清客章伯和、張小渠との交流

『蛩雪存稿』「水仙花」、「落花」、「荷錢」、「又次頼春草翁韻」、「蓼花」、「瓶笙」の上欄或い

は文末に「小渠曰」とあり、「雪達磨」の上欄、「不倒翁」の文末に「清人章伯和曰」とあり、その評語が掲載されている。これらのことから、元稹が清客章伯和・張小渠と交流したことは明らかである。

<引用文献>

『大阪天満宮御文庫国書分類目録』、1977年、大阪天満宮
長沢規矩也編『和刻本漢詩集成』17、1977、古典研究会
芳村弘道「近代大阪漢文学の泰斗 近藤南州の編著について」、2007.7.29、大阪芸能懇話会
萩原正樹「近藤南州手記『詩余』、『学林』70、2020、95 - 112、中国芸文研究会

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 JIN CHUNYU	4. 巻 75
2. 論文標題 立命館大学図書館西園寺文庫所蔵の『詞綜』について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中国芸文研究会四十周年記念論集	6. 最初と最後の頁 435 ~ 461
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 JIN CHUNYU	4. 巻 24
2. 論文標題 新見日本経學者佐藤一齋詞六首考述	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 域外漢籍研究集刊	6. 最初と最後の頁 141 ~ 154
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 JIN CHUNYU
2. 発表標題 高青邱詩的伝播: 長三洲和近藤元粹の次韻詩
3. 学会等名 第四屆智能媒體與詩禮文化研究國際論壇（國際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 JIN CHUNYU
2. 発表標題 日本経學者佐藤一齋填詞六首再探
3. 学会等名 東亜詞学文献整理與研究學術研討会（國際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 JIN CHUNYU
2. 発表標題 経学者佐藤一斎の填詞 新見六首をめぐって
3. 学会等名 日本中国学会第七十四回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 JIN CHUNYU
2. 発表標題 The Circulation of 'Chinese Character Books' and the Development of Cultural Exchanges between Japan and China during the Meiji-Taisho Period: The Case of the Books Compiled by Gensui Kondo
3. 学会等名 The 20th Asia Pacific Conference 2022 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 JIN CHUNYU
2. 発表標題 山田政苗『蠶堂詩鈔』及び所収詞三首
3. 学会等名 白川静記念東洋文字文化研究所プロジェクト研究「日中韓漢籍研究」「日中韓文人交流研究会」
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 JIN CHUNYU	4. 発行年 2023年
2. 出版社 朋友書店	5. 総ページ数 270
3. 書名 中國・日本の詩と詞 『燕喜詞』研究と日本人の詩詞受容	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 “ The Evolution, Reception, and Sharing of Sinographic Culture: Textual Analyses and Theoretical Studies ”	開催年 2023年 ~ 2023年
---	----------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------